

○宗と○帝って、どのように使いわけているの？

漢武帝とか唐太宗といった中国歴代皇帝の呼称は、いずれも生まれたときにつけられたもの、いわゆる名前ではありません。もちろん、どんな皇帝も生まれたときから皇帝だったわけではないので、名前に相当する「諱」が存在します。たとえば漢武帝なら姓は劉、諱は徹であり、唐太宗であれば姓は李、諱は世民といった具合です。では、武帝や太宗というのは一体どのような呼称なのでしょう。

漢代皇帝の呼称

中国ではじめて皇帝の称号を採用したのは、紀元前3世紀に戦国七雄を統一した秦王、政で、古の聖人である三皇五帝から「皇帝」の2字をとりみずからの称号としました。いわゆる秦始皇帝です。秦王朝は始皇帝の死後長続きせず、その子、胡亥の代に滅びましたが、『史記』などの歴史書では胡亥は「二世皇帝」あるいは「二世」と称されていて、この頃にはまだ元号も存在しないため、紀年も二世皇帝元年などと表記されています。

漢代以降、皇帝にはそれぞれ死後に異なる「諡」が贈られ、それが歴史書にも記録されるようになります。周の制度などについて記したとされる『逸周書』には、「諡法解」という文章が残されており、それによれば諡とは「おこないの跡」、すなわち生前の行動とその評価を1字で表すものだったことがわかります。「諡法解」には、「美諡」「平諡」「悪諡」の3段階にランクわけされた183字が載せられていて、それぞれどのような意味をもつかが簡潔に述べられています。後世にはこれを基準としながらも増補が繰り返され、諡法として運用されていったのです。

皇帝への諡号が定着したのは漢代以降のことです

が、そのなかで前漢初代皇帝の劉邦だけはやや変則的です。劉邦に贈られたのは「高」の字で、『史記』や『漢書』では「高皇帝」と称していますが、実はこの字は当時の諡法にみられない字だったようで(現行の『逸周書』『諡法解』には「高」は含まれている)、『漢書』の注釈では「功がもっとも高い」から特別に「高」としたとあります。要は、この時期にはまだ皇帝に対する諡号が十分に慣例化されていなかった、ということなのでしょう。以後、前漢の2代皇帝には「恵」、3代皇帝には「文」というように、諡法に則った諡が贈られるようになり、それぞれ恵帝、文帝と一般に呼称されるようになります。ただ実際には、漢代の皇帝は、ほぼすべて(祖先を大切にするという意味の)「考」の字が付随して贈られていました。そのため正式には、恵帝は「考恵皇帝」、文帝は「考文皇帝」と書かれています。例外は前述した前漢初代の「高皇帝」と、後漢初代の「光武帝」です。いわゆる光武帝は、「前業を継承する」意味の「光」と「禍乱を平定する」意味の「武」の2字を贈られた最初の皇帝だったのです。

こうして漢代以降、皇帝は諡号を用いて称するのが一般化しました。そのため、のちの王朝でも西晋武帝や、北魏孝武帝、隋煬帝など、諡号に帝を付して呼ばれるようになったのです。

諡号のインフレと廟号

ところが、唐代になって儒教による礼の制度化が進むと困った問題が発生しました。唐の初代皇帝である李淵は、死後「大武」の諡号を贈られていますが、2字の諡号は後漢光武帝以来、功績の大きかった皇帝にしばしばみられるものだったため、とりわけ特

異なることとはいえません。つまり李淵は、一般に大武帝と称されるはずでした。しかし、3代皇帝の李治(高宗)の時代に改めて「神堯」の諡を贈られ、9代皇帝の李隆基(玄宗)の時代には「神堯大聖」の4字の諡、さらには「神堯大聖大光」の6字の諡を贈られることになりました。これは、様々な礼制を整備する際に、より偉大な皇帝にはより立派な諡号が必要とされたからで、いわば諡のインフレが始まったのです。このように字数の多い諡は自然とほかの皇帝にも波及することになり、2代皇帝の李世民(太宗)や李隆基自身も6字の諡を贈られることとなりました。この傾向は後代になってもとどまることはなく、北宋初代皇帝の趙匡胤は、死の直後に6字の諡を贈られています、のちに3代皇帝(真宗)の時代になって、なんと16字の諡を贈られることになりました。こうなると皇帝を諡で称するのは現実的ではなくなります。

そこで唐代以降の皇帝は廟号で称することが一般化して、李淵のことは唐高祖、李世民は唐太宗、李隆基は唐玄宗と呼ばれるようになりました。廟号は、やはり漢代以降、皇帝の死後に贈られるようになったもので、皇帝が祖先祭祀を行う際に用いる称号です。そのため、実際には皇帝の位についていない人、たとえば初代皇帝の父祖などにも贈られています。廟号に用いられる字は諡法に準じ、贈られる1字に「宗」を組み合わせるのが一般的ですが、王朝の創立に功があった一部の皇帝には、「太祖」や「世祖」にみられるように「祖」の字がついた特別な廟号が贈られました。なお前漢初代皇帝の劉邦も、王朝の創立者を表す「太祖」の廟号をのちに贈られています、『漢書』や『後漢書』が基本的に劉邦のことを「高祖」と称しているため、漢高祖の呼称が一般的になっています。

ただ廟号はすべて2字で完結するものの、諡号以上に字のバリエーションが少なく、よく使われる廟号はほとんどの王朝で用いられることになります。そのため重複が多いという難点があり、唐太祖、宋太祖のように、王朝名を付けなければ区別できないのは諡号と同様でした。

元号と「一君一元」

これに対して、明代以降の皇帝の場合、元号によ

る呼称を用いるのが一般的になります。明の初代皇帝朱元璋は、20字の諡号をもち、廟号は太祖であるため、史料上は明太祖と称されることもよくあります。しかし朱元璋は、30年以上におよぶ長い在位期間で一度も改元をおこないませんでした。これは歴代王朝では異例で、漢代に元号が始められて以来、空前のことでした。一説には、当時明に敵対する元王朝(北元)が存続していたため、「元」の字は「原」に書き換えられていて、「元年」をあまり用いたくなかったからとの推測がありますが、現時点でその証拠は残されていません。いずれにせよ、この「一君一元」が3代皇帝の朱棣(永楽帝)を始め、明ののちの皇帝に祖法として継承されたために、中国では以後原則として皇帝在位中の改元はおこなわれなくなりました。そうなると元号は、各皇帝と一対一で結びつけられるものとなり、元号によって皇帝を区別する方法が便利だったため、一般化していきました。こうして明太祖である朱元璋は洪武帝と呼ばれ、清高宗である愛新覺羅弘曆は乾隆帝と呼ばれるようになったのです。

ただし明の6代皇帝となった朱祁鎮(英宗)はその例外となります。朱祁鎮は即位して元号を正統と定めたので正統帝と称されることもありますが、のちに土木の変によりオイラト部の捕虜とされ、その間、弟の朱祁鈺(景泰帝)が7代皇帝として即位しました。しかしオイラトとの和解成立後、朱祁鎮は明へと返還され太上皇となりましたが、政変が発生して、再度皇帝の位につくこととなったのです。このとき、元号を新たに天順としたので、明の皇帝のなかで朱祁鎮だけが2つの元号を使用したこととなります。そのため、元号による正統帝もしくは天順帝という呼称ではなく、廟号を用いた英宗の方が一般的に用いられるようになったのです。

(うめむら・なおき／北海道大学大学院文学研究院准教授)